ロレンスの短編小説

田　中　　實

1

D.H. ロレンスは数多くの長編小説を書いているが，短編小説もハイネマン版に収録されているだけで53編に及ぶ．そのうちの約1割の秀作6編を選んでここで分析・検討したい．『バラ園の影』(*The Shadow in the Rose Garden*, 1908) は13頁の長さで，約6500語，『プロシア士官』(*The Prussian Officer*, 1913) は23頁，約11500語，『てんとう虫』(*The Ladybird*, 1921) は69頁，約34700語，『馬に乗って去った女』(*The Woman Who Rode Away*, 1924) は35頁，約17600語，『太陽』(*Sun*, 1925) は19頁，約9500語，『死んだ男』(*The Man Who Died*, 1927) は47頁，約23600語である．

そもそも短編小説 (short stories) は登場人物やその生活環境をあまり綿密に描くことはないであろう．ロレンスは短編小説において，人生の一断面，人間生活の一局面を虚構として端的に描き出している．ここではロレンスの6編の作品を出版年代順に扱い，分析・検討していくことにする．

まず第1編目は『バラ園の影』であるが，これは当初，『牧師の庭園』(*The Vicar's Garden*) という題であったものを1913年に改題したものである．バラの花咲く教会の庭園ということで，男女のバラ色の恋の花が

開く，激しい情熱的な風景がイメージされる．ある日，人妻である女性が夫に内緒で小道を散策していると，バラの茂みにさしかかり，自分というものの存在意識がそこに埋没し自我を喪失しそうな夢心地になる．

> She sat quite still, feeling her own existence lapse. She was no more than a rose, a rose that could not quite come into blossom, but remained tense. ....She was not herself. [1]

このような時，ある影が自分をよぎるように目に映った．男性の姿であった．以前，彼女が熱烈に愛した恋人(牧師の息子)に出会ったのだ．だが，この昔の恋人は変わりはてた狂人の姿であった．戦地で日射病により死亡したと言われていた元の彼氏が，心を病み精神を破壊されて帰ってきていたのだ．彼女は心に秘めていたこの恋人のことを夫に話した．

> She could neither eat nor talk during the meal. She sat absent, torn, without any being of her own. [2]

この過去のことで夫婦は口論となり，夫は怒り心頭に発した．彼はできるだけ感情を表わさないようにしたが，内心激怒し，顔面蒼白となった．夫は妻を放置し部屋を出て行ってしまった．これはこの夫婦が新婚旅行中のことであり，事態は深刻である．妻が夫フランクと互いに愛し合うことができないのは，彼女が意識はしないまでも昔の恋人の幻影を求めていたからである．昔の恋人アーチー氏はアフリカで死亡したはずであった．その元恋人が戦争被害者で狂人となって彼女の前に現われたのである．

---

[1] D. H. Lawrence: *The Collected Short Stories* Volume One (Henemann), p. 226.

[2] *op. cit.*, p. 229.

『バラ園の影』には新婚夫婦の心理的葛藤が描かれている．夫フランクは自分の容貌に自信と悲観とが入りまじった感情を抱いていた．彼は無表情な子供っぽい顔立ちで，妻に一歩譲って接していた．彼女の方は昔の恋人のことが無意識に影響して，夫を心から愛することができなかった．彼女は昔の男を忘れることができないでいる．彼女は懐かしさのあまり，昔彼に会った教会のバラ園を訪ねたことにより，狂人と化した昔の恋人に会ってしまった故に，苦悩と喜悦が混淆した心境である．彼女の夫としては寝耳に水，青天の霹靂以外の何ものでもない．この夫婦の溝は広まることはあっても狭まることはないであろう．これは短い作品であるが傑作といえる．

2

『バラ園の影』から５年後にロレンスは，『プロシア士官』を世に出す．これは軍隊生活の物語である．そしてこれは最高傑作の短編と評価されている．連隊が行進を続けているところから始まる．その中に兵卒(従兵)シェーナーと大尉ハウプトマンが登場する．軍隊では上官と部下の関係には厳しいものがある．大尉ともなれば一般の兵士たちにとって絶対服従の存在である．

彼らは30キロ以上も進軍した．彼は黙々と歩き続けた．士官は部下の兵卒の行進ぶりに絶えず気を付けていた．士官の方は目下結婚する気がなく，時々，女を買っていた．彼はプロシアの貴族ということで傲慢で横柄なところがあった．怒れば烈火のごとく悪魔のごとくであった．情熱的な気質の士官は兵卒をいじめた．士官は彼に特別に監視の目を向け，厳しい命令を下すことがあり，時間もわきまえず一晩中，兵卒にひたすら仕事を課し，この部下の顔が沈み込むのを見て快感を味わうの

だ．まさにサディスティックな仕打ちだ．兵卒の方は自分の時間を取り上げられ，束縛を感じるようになる．無口になり無表情になり士官を避けるようになった．

> As yet, the soldier had held himself off from the elderman. The Captain grew madly irritable. He could not rest when the soldier was away and when he was present, he glared at him with tormented eyes. He hated those fine, black brows over the unmeaning, dark eyes, he was infuriated by the free movement of the handsome limbs, which no military discipline could make stiff. And he became harsh and cruelly bullying, using contempt and satire. The young soldier only grew more mute and expressionless. [3]

士官は兵卒を見るなり狂おしくいらだちを覚え，心中，人間性を攪乱される思いがした．士官の深層心理はいささか同性愛的なものといえる．だが，兵卒には素朴な乙女の恋人がいてお互いに愛し合っていたのだ．兵卒は恋人に詩を書くことがあり，それを士官から咎められる．兵卒は徐々に士官の魔力に動かされていく．

兵卒は自分自身が影のように空虚な感じであり，世界を脆い影のように感じるようになった．上官の大尉の存在もうつつのものとは感じられない．兵卒は士官に対する憎悪から虚無感がつのるばかりだ．士官が落馬した時，兵卒は憎しみのあまり，倒れた士官の胸に膝を立てて，顎をぐいぐい木の幹に押しやって，士官を息絶えさせる．殺害による本能的充足感はあったが，兵卒は自分の人生は終わったと絶望感に浸る．間もなく兵卒自身も日射病がもとで入院し，まるで情死と疑われるような形

---

[3] *op. cit.*, p. 99.

で死亡してしまう．

精神分析的に見れば，２人の男性間の意識と無意識を対比した二元論的な手法の短編小説といえる．士官は兵卒に対して愛と憎しみのアンビバレンスがある．軍隊では男同士の同性愛的な関係がとかく生まれがちな土壌があるであろう．ロレンスは変態性欲的な暴力とセックスをこの２人の人間関係に表現している.[4]

3

次に『てんとう虫』（*The Ladybird*, 1921）を分析・検討する．この作品は短篇としては比較的長めのものであり，厳密には中編（short novel）に類するものである．『てんとう虫』は本論文で扱う作品中最も長いものであり，69頁，約34700語に及ぶ．傑作といわれるだけに芸術作品を味わった読後の充実感がある．

ロレンスはこの作品で新たな人間同士の関係，とりわけ男性と女性の新しい関係の仕方を探ろうとしている．そして人を統率していくリーダーシップの意義を認めて，これに基づく男と女の関わり方を示している．この小説では神秘主義的な傾向が遍在しているように思われる．ヨハン・ダイオニス・プサネク伯爵の眼は相手に魔術的な非人間的な力を発揮している．この魔力によって，バジルの妻ダフニは意志を失ったかのように意識が薄れてしまうのだ．

夫のバジル・アプスリィ少佐が戦地から帰還するのを妻ダフニは待つ．バジルの方は妻ダフニを宗教的な意味で敬意をはらっていた．妻は夫の帰りを待つ間に，病院のベッドに横たわる敵の傷病兵ダイオニスが

---

[4] Janice Hubbard Harris: *The Short Fiction of D. H. Lawrence*, p. 274.

彼女の気になる存在になっていく．やがて夫が戦地から帰還する．しかし夫バジルと妻ダフニは性的肉体関係が希薄で軽んじられている．美人のダフニ夫人はお金はないが尊敬できる，名声のあるこの男性と結婚した．彼女は病弱で彼女の２人の兄は戦死しているという境遇である．

バジルの妻ダフニは母ビヴァリッジ夫人から重傷の兵士ダイオニスのことを聞く．ダイオニスは小柄な30代の男であった．この男は自分は死んだ方がいいと思い続けている．彼の妻は家出してしまっているのだ．しかし容体は少しずつ回復に向かっていた．捕虜の身であり，あまり早く治りたくないとも彼は言う．法により自由を失っていたのだ．ダフニ夫人は彼に会ってから10日もたつとこの男が忘れられずその病院を訪れる．ダフニもダイオニスも今続いている第１次世界大戦が気がかりなのだ．ダイオニス伯爵の魂の中には怒りだけが生きている．男にとって今必要なことは，賢明な唯一の方法は黙っていることだと心得ている．彼はダフニとだけは話をする．彼女は魂を失ったこの負傷兵ダイオニスに親切にする．過去にダイオニスは母にシャツを縫ってもらい，彼のイニシアルとてんとう虫の紋章をそのシャツにつけてもらっていた．そこでダフニはこの小男にもらった指貫を使い，シャツを縫って届けるようになる．

ダイオニスは持論をダフニに展開する．真の生きた世界は暗黒の中にある．真の愛は暗いもので闇の中に闇とともに脈打っていると逆説的なことを説く．女性たちが男を賛美し，熱をあげたのは男の表ではなく裏返しの面なのだ，本当の自分は深夜に呻く黒い牡猫なのだと言う．ダフニは無意識にこの男の深夜の猫の眼の奥の黒い瞳を欲求している．男はダフニの表面の美しさの深奥の，眼には見えない部分を愛したかったものと彼女は察する．ダイオニスの愛はどこか風変わりな隠微なものに相違ないのだ．

夫バジルがやはり負傷して軍隊から帰還するのをダフニは待っていた．その間に，小男の闖入者ダイオニスに彼女は心が傾きかけているのだ．温和で誠実な長身の夫を愛してはいる．だが負傷して帰ってきた夫は昔の夫ではない，彼の冷たさを感じる．死そのもの，死神のようなのだ．夫バジルは自分を越える存在として妻ダフニを愛しているというよりは崇拝しているという．彼には妻が女神的存在なのだ．そんなある日，ダフニはダイオニスにもらった指貫を夫に発見される．ダフニは自分は気高い人間ではない，自分の神性なんて信じられないので，精神主義者の夫への愛がさめようとしている．そして彼女はダイオニスを切に求めはじめるのだ．つまりダフニは２人の男性を操っている状態なのである．

そのうち，ダフニは夫バジルとともにダイオニスに会いに病院へ行くことになる．三者が顔を合わせた席で，哲学の学位をもつバジルは，人間は接触（contact），なかでも愛の接触をもつことの大切さを説く．

> “ Well, do you know,” said the Major, “ it seems to me there is neally only one supreme contact, the contact of love. Mind you, the love may take on an infinite variety of forms. And in my opinion, no form of love is wrong, so long as it is love, and you yourself honour what you are doing. Love has an extraordinary variety of forms. [5]

バジルは多種多様の愛があるが，この愛こそ至上の接触と主張する．愛の魂を賛美する．愛は広義には人間を結束させる偉大な力なのである．このような夫に対して，妻のダフニは全面的に賛成することはでき

---

[5] D. H. Lawrence: *The Short Novels* Volume One (Heinemann) , “The Ladybird”, p. 47.

ず，むしろ夫の精神主義に反発すら感じるのだ．人間はみな平等を言いながら，社会生活や国家組織には必ず指導者と呼ばれる人々が登場する．ダイオニスは命令することのできる魂には臣下になると考える点でニーチェ的と言える．バジルが指導者に愛の精神を求めているが，ダイオニス伯爵は愛はあらゆる人間に裁く権利を与えるものだと言い，２人はデモクラシー精神から意見の一致をみる．だがダフニは女性として男全体にいらだちを感じていたのである．

ダフニは自分と下層階級との間に越えがたい溝が作られているように思うのだ．この「溝」(gulf)[6]については，のちにロレンスが『チャタレイ夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*, 1928) に次のようなくだりが見られる．

> It was not that she and Clifford were unpopular, they merely belonged to another species altogether from the colliers. Gulf impassable, breach indescribable, such as is perhaps non-existent south of the Trent. But in the Midlands and the industrial North gulf impassable, across which no communication could take place.[7]

負傷兵のダイオニス伯爵はほとんど無意識に子供の頃の古い歌を口ずさむくせがあった．つまり童心を今も相変わらず保持している純粋さがこの男にはあると思われる．離れた部屋にいるダイオニスの歌声をたびたび聞いているうちに，その歌声が彼女を呼んでいるように感じられてくる．ついにダフニは彼の部屋を訪ねる．彼女は夜の闇の中でダイオニスの妻同然の時を過ごす．闇の中で彼は彼女に，あなたはぼくのものだ

---

[6] *op. cit.*, p. 59.

[7] D. H. Lawrence: *Lady Chaterley's Lover* (Heinemann), p. 57.

と言う．ダフニの夫はこれまで夫婦の肉体関係は義務的に済ませる程度であった．夫バジルには妻ダフニがいわば妹のような存在であり，性的関係は二の次のことなのだ．ダイオニスは別れの朝，私の魂をあなたの子宮（womb）の中にあずけて行きますという．強烈な言葉だ．あなたはてんとう虫の奥さんですとダイオニス伯爵は言い残す．

『てんとう虫』では第1次世界大戦中の負傷兵や捕虜の問題[8]，さらにリーダーシップの問題を扱っている．そこに軍人の妻ダフニが介在し，真の愛とは何かを追求している．ロレンスによって『チャタレイ夫人の恋人』が書かれる前の段階としての心境が，この短編『てんとう虫』にその萌芽として見られる．

4

第4番目の短編として『馬に乗って去った女』を考察する．この作品は長さの点では『てんとう虫』のおよそ半分の長さの物語である．夫のレダマンは銀鉱の所有者として仕事一筋に仕事の鬼として生きてきて，その道の成功者であった．彼が結婚したのも，子供を持ったのも実業家としての生き方の一部なのだ．夫は53歳でなお独身のつもりで自由にふるまっている．妻は20歳年下で，レダマンの男らしさ，冒険心に富む生活ぶりに心を惹かれて結婚したのである．10数年結婚生活を送っているうちに，夫というものに接しているのが彼女には心身ともに非現実に感じられてくる．夫婦の間に溝が生じ，冷えた疎遠な夫婦関係となっていく．夫による形式的な拘束や呪縛的なものから開放されたい気持ちになる．夫が妻を単に支配し上から屈服させて，不平等な隷属的な立場

[8] Janice Hubbard Harris, *ibid.*, p. 171.

に置こうとする．この態度に彼女は精神的に耐えがたい気持ちになり，やがて，彼女の心に狂いが生じ，２人の子供を置いて，この家を出て行かねばならないと考えるようになる．

彼女は物質文明の華やかな大都会へ出て行くのではなく，荒野を目指して行く．夫や一般人が野蛮とみる，未開文明の暮らしをしているアメリカインディアン部落を目指して馬を駆る．[9] 彼女は非現実的で愚かなロマンティシズムに酔い痴れた．最も神聖視されてはいるが人間を生け贄にするというチルチュイ・インディアンを訪ねる旅に出た．彼女は独り身になった今，何ら不安感や恐怖心を抱かない．いわば内的な自由を得た彼女は解放感を味わいながら行く．秘境にやってきて，インディアンに会うなり，酋長に対して，白人（文明人）の神に飽き飽きしてチュルチュ・インディアンの神様を探し求めにきたという．この言葉を聞いて，未開の種族で野蛮な習慣を持つインディアンたちは妙にわくわく意気揚々として勝ち誇った悦びに浸るのだ．

彼女はインディアンの言いなりに死をも覚悟して裸で石の上に横たわる．インディアンは彼女を個人の女性として見ず，没人格的，神秘的存在とみなしている．彼らは彼女を神に捧げて支配力を取り戻す儀式を行なう．インディアンはこの白人女性に敬意を示さず，近代女性虐待とも取れる行為をする．彼女は自分の意志をなくして忘我の境地に陥る．彼女は茫然自失の奴隷のごとくである．女がインディアンたちの前で裸身をさらす行為をロレンスがあえて描いたことに対して，フェミニスト側から女性蔑視との批判があるのもうなづけるが，作者の真意は母なる大地，母なる自然として女性は大地に根ざす強みを原始時代から連綿と持ち続けてきたことを示唆することと思われる．

---

[9] *op. cit.*, p. 184.

Then the old man spoke again. The Indian led her to the bedside. The white-haired, glassy-dark old man moistened his finger-tips at his mouth, and most delicately touched her on the breasts and on the body, then on the back. And she winced strangely each time, as finger-tips drew along her skin, as if Death itself were touching her.[10]

インディアンの男たちは人類に光と温もりを送る太陽に奉仕して悦び，女は太陽の恩恵で光る受動的な月の静けさに仕えるのだ．男たちは太陽をわがものとして獲得し，女たちは太陽を中心にめぐる淡い光の月を奪還する．太陽の安らぎと月の安らぎが混ざり合って融和合一するのだ．彼女は赤い太陽が沈もうとしているのを見て，人々が待ち望んでいるこの象徴的な日没の瞬間を，黒い眼のインディアンたちと共に眺めていたのである．近代国家の文明の爛熟後の没落を示唆しており，現代人へ警鐘を鳴らしている．

5

第５番目として『太陽』を検討する．作品中のジュリエットは夫モーリスの欲求に道徳的に従う，古風な自我の持ち主である．とある暑い朝のこと，ジュリエットは日光浴をするため裸で散歩するが，病的に沈んでいた心は快方に向かい，精神のバランスを回復する．そこにイタリア人の農夫がふと現われる．彼は心に安らぎをそそぐ太陽のように彼女には感じられた．彼女にとり，一般の人々は人間が自然の一部であるとの自覚を失い，生きとし生けるものの自然との根源的なつながりを疎遠に

[10] D. H. Lawrence: *The Collected Short Stories* Volume Two, p. 564.

していると思われた．人間社会が太陽を無視した墓地のごとく感じられるのだ．

赤々と燃える太陽が水平線上に昇るのを見て，ジュリエットは目映い太陽の下を素っ裸で歩きたい欲望をそのまま実行に移す．そして自分の実ったぶどうのような乳房に暑い偉大な太陽を実感する．神秘的な太陽が彼女１人に焦点をあてているかのような不思議さを感じとっている．太陽を男性的イメージとして捉え，彼女が太陽を知り，太陽も彼女を知ったのである．太陽に鑑賞されたと感じるのである．太陽はまた超自然的超人格的な視野での宇宙を支配する太陽神的な存在に感得される．[11] 彼女は毎朝のように裸のまま糸杉の樹の下に横たわり歓喜を快感を味わうのであった．彼女は太陽に向かって無意識の底から湧き出ずる何かの力を感じていた．彼女は太陽のおかげで元気を取り戻し，太陽の治癒力を悟った．

現代文明というものが冷たい機械のような存在であり，人間にとり避けられないものと考えられる．そういう中で人間の原点に帰り，自分の子供とともに全裸となり，日光を受け人目に晒すことになる．彼女は歩いていて農夫に会う．農夫というのは日の出とともに鍬をかついで野良に出て日の入りとともに家路を辿る．全く自然にのっとった，自然と一体感のある生活をしているといえる．

> And Juliet had thought: Why shouldn't I meet this man for an hour, and bear his child? Why should I have to identify myself with a man's life? why not meet him for an hour, as long as the desire lasts, and no more? There is already the spark between us.[12]

---

[11] Janice Hubbard Harris, *ibid.*, p. 241.

[12] D. H. Lawrence: *The Collected Short Stories* Volume Two, p. 544.

この農夫は現代文明の恩恵を受けて先端的な生活をする都会人とは対照的で，野性的な自然人の力を持っていた．農夫の眼に熱い炎が燃え立ち，彼女の骨を溶かすかと思われるほど，彼女の体内に炎が燃え立つのであった．ジュリエットは本能的にこの農夫の子を生むことがあっても不思議ではないと感じたのである．

6

最後に第6番目の作品として，『死んだ男』を検討する．この短編は比較的長めの作品で，作者ロレンスが亡くなる3年前に書かれたものである．これは生前，『逃げた雄鶏』(*The Escaped Cock*)という題名であったが，彼の死後，出版社の意向で『死んだ男』と改題されて出版されてきている．この世に生きたイエス・キリスト（Jesus Christ）をモデルとしながらも，磔刑となり埋葬されて3日目に甦り復活したキリスト教の伝統からは逸脱した独創的な，男の物語となっている．

ロレンスはキリスト教から発想の転換をはかり，この死んだ男は磔にされたものの，死に至る前にそこから引き降ろされたために半死半生の状態から甦った男という設定になっている．死んだ男は磔から降ろされるのが早すぎたのだ．見つかれば再び磔にされたであろう．生還した時，足は傷つき食欲も生きる意欲もなく，口をきく気にもならず，吐き気を伴う幻滅感があった．物語の舞台はエルサレム近郊の農家の周辺から始まる．ある夫婦が暮らす農家から雄鶏が逃げ出すが，この鶏を死んだ男が捉まえて農家に返す．男はそれが縁でこの農家に匿われる．男は翌日マドレインという女性に出会う．男はこの女に自分の過去の生は終了したことを話す．死から生還したこれからの生は自己犠牲的な奉仕の精神に生きるのではなく，おのれ自身を生かした独りの生を送るのだと

言う．

エジプト近くの海岸沿いのイシスを祀る神殿に男は辿り着く．ここで女神イシスに仕える女（巫女）に出会う．女神イシスは古代エジプト神話に出てくる神である．死から現世に戻った男は，ここで女神イシスの夫オシリスの立場になったかのように女に慕われる．男は女神イシスのような優しさに心を満たされ，女の方は男を甦ったオシリスのごとく親しみを感じるようになる．やがて女は妊娠する．男はこの巫女との接触で生命の種を蒔いたのだ．ここで異教の神が登場することにより，キリスト教的な，神は愛なりという信仰からの奉仕的な愛が否定されていく．すなわち，汝の敵を愛せというようなキリスト教精神は放棄されている．ひたすら与えるだけの奉仕の愛ではなく，愛を受容する愛が必要だというのである．人の善意を慈恵的に押しつけようとするのをやめる．“Live and let live”（生きよ，かつ生かせ）という諺のように，自分が先ず生きかつ他人をも生かす愛の道を模索しているのだ．

この作品中，接触（contact）や子宮（womb）という言葉によく出くわす．ロレンスの官能を解放し欲望を肯定する生命主義が見られる．一度死んだ男という発想は男が生まれ変わったことになる．数多の宗教の存在を認識しキリスト教を客観視している．男は復活したがキリスト教的な復活（the Resurrection）ではなく，いわば個人的な甦りである．男は死の眠りの中にあってはこの世から追放された虚無感に浸っていた．死の国から生の国へ生還する．発想が奇抜で風変わりであり，想像力をかき立てられる物語である．

キリスト教の歴史ではイエスがキリスト（救世主）になったが，死んだ男（生き返った男）はエルサレムの町には背を向けて，予言者としてではなく，反対の方向へと道を辿る．男は生き返ったばかりの時は保護された農家の庭で，ただ太陽だけが彼の心を引きつけ，彼という個体を

支配していた．いったん死んだ男は現実の生の世界を目の当たりに見わたし，そこに生命の意志の力を目にする．人間は意志する動物である．人類には意志があるのだ．生の運命の力の方が死の運命の力より強力なのを男は認める．伝統的なキリスト教は肉体に重きをおかないが，死んだ男は肉体にもそれ相応の重きをおく．師としての，救世主としてのイエス・キリストは死んだ．救世の仕事は終了した．彼は偉大な存在になろうとしてユダに裏切られたのだ．死んだ男は異説イエス・キリストとして，そこから甦り自分の限界を知り，自分だけの目的を持ち，自分流の生き方をして他人を支配することなく世渡りをしていきたいと考える．

彼が出会った女マドレインは受け取る以上に与えたい，受け取ることなど無しにして，貪欲に与えようとするのだ．死んだ男に何もかも差し上げるという．まさにキリスト教的な自己犠牲の精神である．男はマドレインから離れ，また農家に戻って行く．彼はそこの庭で横たわるが，生の世界に背を向け，まさしく生きながら死んでいる男（living-dead man）なのだ．男が現世に精神的に甦るきっかけは，肉体の広大な生を知っている女マドレインのおかげであった．彼女は幾度か彼に金を渡す．その金を男は農夫にあげていた．父なる神の元へ昇らねばとの思いも虚しく，男は伝道や福音から遠ざかってしまった．男はいま孤独を認識し，孤独を最上のものと考え，他人を不必要とする心境となる．男は，神は死んだと言い放った孤高のニーチェ的な思索の人となっている．人間の同胞を求める心が希薄になっている．この男の生きる道は他者に左右されないこの男だけの道なのである．自分の殻の中に，皮膚の中にただ独り閉じ籠もっているのだ．

彼は農夫から例の雄鶏を買い求め，抱いて現実の旅へ出発する．男はかつて救世主として説教をし，愛を強制したために磔による死刑に処せられるはずであったが，完全に命を奪われずに，命拾いをして今の自分

がある．しかし，人間は死に対して究極の本質的な不安があり，恐怖があるので，いかなる男の人間精神をも狂わせることすら起こる．神殿で女神イシスに仕え，イシスを守る巫女に出会い，男は優しい女の炎を見る．死よりも恐ろしいくらいに美しい女の炎を見る．男はイシスの女の言うままに裸になってイシスの像の前に立つ．

男は女神の前で生きることへの欲求が沸くが，死の重荷からは脱出できず，絶望的な気持ちになる．思えば男は救世主キリストとして，肉体とは別の精神的な神の愛を説いたのだった．キリストの弟子の１人ユダは肉体を持ったこの男を愛していたのだ．しだいに男の心の中には，触れ合いのある，柔らかな愛が歓喜に満ち溢れた愛が，非キリスト教的な愛が現われてきた．

女は男の傷口に油を塗ってくれる．人間的な温かみが男の全身に広がっていく．男は女の体を愛撫した．男の性の情熱的な炎が，力ある炎が腰のうちに燃え上がる．男はこの女を知り一身同体となった．こうして彼は彼流に人間的に甦ったのである．ロレンスのこの作品を貫くキーワードは温かみ（warmth）なのである．

> He untied the string on the linen tunic and slipped the garment down, till he saw the white glow of her white-gold breasts. And he touched them, and he felt his life go molten.“ Father!” he said, “ why did you hide this from me?” And he touched her with the poignancy of wonder, and the marvelous piercing transcendence of desire. “ Lo!” he said.“ this is beyond prayer.” It was the deep, interfolded warmth, warmth living and penetrable, the woman, the heart of the rose! My mansion is the intricate warm rose, my joy is this blossom![13]

[13] D. H. Lawrence: *The Short Novels* Volume Two, p. 43.

ロレンスは肉体的・人間的な自我を賛美する．裏を返せば男性性器の勃起は復活を暗示し，ロレンス自身は自分の性的無能力(impotence)を嘆いている．男は女が妊娠しているのを知るが，また戻ってくると言ってこの女のもとを去る．ここにとどまればローマ人の手に渡されて再び厳しい裁きを，極刑を受けることは必定だからである．こうして，ロレンス流の新たな復活物語は彼の長年のキリスト教批判や批評が芸術的に結集した作品となっている．ここに彼の晩年の宗教観が表われている．従来の伝統的な，復活したイエス・キリスト像が，ロレンスにとって長年の疑問であり障害であった[14]．死んだ男自身が人類の予言者ロレンスの分身であるといえる．

以上，６つの短編を分析・検討してきたが，いずれの作品においても作者ロレンスの生命主義が横溢し躍動している．既成の宗教やイデオロギーに拘束されない全く自由な発想により，原始時代から連綿と続く人類の純粋な人間性が息づいている．現代文明に毒されることなく，自然の恩恵に浴しながら，肉体と精神をそなえた温かい人間性が希求されている．

---

[14] Tolan, H. C. Trimpi: *The Quest for Identity in the Shorter Fiction of D. H. Lawrence* (University Microfilms International), p. 155.